

誰が悪いのでもない

明子は何処へ

萩原 葉子

誰が悪いのでもない
明子は何処へ

萩原 葉子

海竜社

<著者略歴>

萩原葉子（はぎわら ようこ）

1920年、萩原朔太郎の長女として東京に生まれる。精華高女卒業。1959年『父・萩原朔太郎』（中公文庫）でエッセイスト・クラブ賞を受賞、以後、文筆活動に入る。1966年『天上の花』（新潮文庫）で新潮社文学賞、田村俊子賞を受賞、1976年『蓼麻の家』で女流文学賞を受賞、続篇『閉ざされた庭』（ともに新潮社）、『束の間の午後』『仮面舞踏会』『万華鏡』（以上中央公論社）、『遅咲きのアダジオ』（主婦と生活社）、『初めての季節』（海竜社）、『ダンス入門』（文化出版局）、『幸福を見つける生き方』（ダイワポート）、『ひとりぼっちの思春期』（ポプラ社）など著書多数。

誰が悪いのでもない

定価 一、二〇〇円

昭和六十一年六月三日 第一刷発行
昭和六十一年九月十三日 第八刷発行

著者 萩原 葉子

発行者 下村のぶ子

発行者 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四

電話 東京（〇三）五四二一九六七 振替 東京一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1986, Yoko Hagiwara, Printed in Japan

ISBN4-7593-0149-6 C0095 ¥1200E

目次

〈前 章〉	宿命か神の悪戯か	6
〈本章 1〉	明子 アキラ の誕生	18
〈本章 2〉	恋に狂った母	25
〈本章 3〉	明子五歳、突然の不幸	32
〈本章 4〉	母なしっ子	44
〈本章 5〉	智恵遅れ	57
〈本章 6〉	閉ざされた日々	69
〈本章 7〉	父の死	81
〈本章 8〉	私の結婚	93
〈本章 9〉	妹も女	104

〈本章10〉	姉と妹の十字架	122
〈本章11〉	不毛な諍い ^{いさか}	136
〈本章12〉	二十五年目の母との再会	150
〈本章13〉	女同志の対決	163
〈本章14〉	火宅	175
〈本章15〉	つかの間の平和	185
〈本章16〉	悪魔のごとく	196
〈本章17〉	母とは何？	211
〈終章〉	誰が悪いのでもないのに	229
あとがき		240

ブックデザイン——切り絵 宮田雅之

誰が悪いのでもない

〈前章〉 宿命か神の悪戯か

重い面会日

お姉さん、元気ですか、明子は、元気でいます、
めんかいは、いつくるんですか、待って、います、

今度、くるとき、ワンピースと、おにぎりを、たのみます、腰が、いたくて、おいしゃ
さまに、みてもらってます、では、さようなら、

このごろは、もう、うそは、いいませんから、お姉さん、あんしんして、ください。

明子

今日も私は西武池袋線K駅から、タクシーに乗った。「S病院までお願い」と、運転手に言った後、窓から町の風景を眺めるのだった。

少女時代から妹の嘘をつくという病癖に悩まされて来た私は、いま、ようやく苦しみから解放されたことを思った。苦しい時は哑になってくれることを願った時もあった。

妹は、病院で薬を服^のむようになって、いまは静かになっていた。

もっと数多く面会に来られればよいのに、めったに来られないでいる。そのことが重い気分になっていた。妹も六十三歳という年で、身体のあちこちに痛みを生じ、その訴えを聞くのもつらかった。妹は会う度に太り、顔も年輩っぽく変ってゆく。気持だけは変らないのに、身体が変わるのだった。

林の道をくねくねと廻り、山道の中腹で車は止まった。この辺りは昔から結核病院のあることで知られていたが、神経を病む人達の静養にも良いところであった。

病院の門前で車を降りると、左側の受け付け兼、外来患者の診察所の扉を開けた。母親に連れられた若い娘や中年の男性が、長椅子で順番を待っていた。白い看護衣をつけた看護婦がカルテを持って、長い廊下を行き来している。普通の病院と同じだが、あまり混んでいないのが特徴だった。

面会の手続きを終え、病院の裏の石畳を渡って歩いていると、一病棟、二病棟の重患の窓から、早くも患者が顔を揃えて私を見ている。退屈している患者達は、面会人の来ることが唯一の事件だった。私は軽く頭を下げながら、妹の六病棟へと向う。

受け付けからの連絡で玄関口には、妹を中心に数人の患者が私を待っていた。またひとまわり太った妹は表情のない顔で「やっと来たね」と、ぶっきら棒に言いスリッパを揃えてくれた。妹の用意したスリッパを履くと入口の広場には、たくさんの方が突っ立っていた。皆、もの珍しそうに私を見ている。排他的で暗い顔の人、愛想の良い人との区別がはっきりしていた。私は、皆に同じように笑顔を向けながら、「こんにちわ、妹がお世話になっていきます」と、いつものように挨拶した。

「アキチャン、良かったネ」「お姉さん来てうれしいだろう？」等々、患者の顔が次第に私を受け入れてくれる。

私は大荷物を抱えていた手がしびれるくらいに疲れていた。冬物と夏物の交替の時期なので、春のワンピース、下着やネグリジェ、ブラウス、靴下等々をデパートで来る時求めて来た。個室の面会所で二十分以内の面会と決められていた。

個室に入ると、ガラス戸の外から覗く人の眼が代る代るあった。

妹は、来る度にここの暮しに馴染んでいるようだった。

「元気でいるの」

「うん、元気」

「風邪は？」

「この間引いた」

「腰はいたくないの」

「今日はいたくない」

あとは話すことがなくなってしまうのであった。妹の身体の障害は看護婦さんに聞かなくては分らなかった。重い気持で、私は妹の身体がまたひとまわり太ったことに注意を向けると、「七十二キロになった」と、無表情にすまして言う。いまは夜尿症も落ち着いたようだった。

「甘いもの食べるからよ」

「食べてない」

妹は、あらぬところを向き、あとは決まってご飯を何杯食べるとか、同室の誰々さんはいま家へ帰っているとかの話である。

忙しい時間を潰して来たのに、これで帰るのも勿体なく、部屋に入って荷物の整理をすることになるのだった。

南に面した十二畳ほどの大部屋は、明るく風通しも良く掃除もゆき亘っていた。妹を入れて六人がここで寝ている。

「お邪魔します」と、この病院にもう十八年もいるという三十代半ばくらいの人に挨拶して、戸棚から柳行李を出し、衣類の整理を始めた。家にいる時はもう散乱のまま、洗濯しないまま放ったらかしてあるのを、選り分けて始末しても、すぐにめっちゃめっちゃにする。ここではそんなことはなく、風呂に入る時は必ず洗濯機を廻すことを規則にしているので、整頓してあった。

廊下で声が聞えるので見ると、妹が向い合いの病室まで知らせに行き、土産物を分けているところだった。外交性があり、すぐに親しくなるのであった。わざわざ呼んで来るほどの菓子でもないのに、もう分けに行ったのか。二階の男子病棟の患者まで礼に来た。

「ごちそうさまでした」と、ていねいに言い、部屋の中に入って来る人もいたり、自分の部屋からビニール袋入りのセンベイを、お返しに持って来たりする。

病院には日常用品がほとんど揃っている売店があり、菓子類から身の廻りのものや、雑

貨類が一切買えるので、ビニール袋入りの菓子を買ひ、互いにプレゼントの交換を楽しんでいる。六号棟は、解放病棟で、許可を得て外出も出来た。

ただし、小遣い帳は必ずつけなくてはならない規約になっていて、妹のように計算ゼロの人は使えない仕組みなのを、特別に許可してくれていた。

精神科の患者は、大学卒の人が多く社会人だった人が、何かの原因で精神的に挫折してしまい、入院となるケースなので記帳などは、普通に出来る。だが妹のように精神薄弱者の大部分の特徴は、計算がゼロだった。同室の親切な人が一緒にゆき計算をしてくれるので、妹は好きな買物も出来た。

生れながらの運命なのか、神の悪戯か

「あのう」と、言う声に振り返ると若い娘がノートを胸にかかえ「すみません、あの、わたし」と、何か言いたそうにしていた。

妹の嘘つき癖を直すために、私はノートを与え文章を書かせていたが、近頃はその必要のなくなったことを思うのだった。

荷物の整理も終わったので、傍にゆくとさっきからじっと私を見つめていた眼で、

「わたし小説を書いています。見てもらえますか」

と、言った。この病院から芥川賞候補になった作家もいると聞いていた。感受性の豊かな人が入院の可能性があるからなのか。見ると、細かい字でぎっしりとノートに書いてあった。前にも男子の患者に、詩を見てくれと言われたことがあった。

男子も女子も、詩や小説を書きたいと言う人は、神経が細かいためにノイローゼに患^{かか}るのだろう。

出されたノートは部厚く、細かい字でぎっしり書いてあって、すぐにはよめない。

「この人、作家になりたいんだって」と、妹の明子が言った。

「いやだわ……あたしなかなれないわ」と、てれくさそうに言うと、「まえに賞をもらったんだって」と、また妹は言った。こういう話には比較的辻つまが合うが、他の話となるとまたおかしくなるのだった。

同室の患者が、妹のために食堂から膳に乗った食事を運んでくれた。私が来たことでまわりの人が気を遣っていた。妹は、食事が来るともうそのことで一杯で、食べ始めるのだった。土産のおにぎりをゆっくりしたのろい食べ方で食べるのも、家にいる時と同じであった。小説家志望の女性も、食事の時間なのでノートを持って去り、今度来た時見て下さ

いと礼儀正しく言うのであった。

六十三歳になった妹は、自分の人生をどんなに考えているのか。食べることと、嘘をつくことの他に何の楽しみもない人生を過して来たのだった。怠け者と、叱ったところで、何の反応も帰って来ない相手なのだ。本人が悪いのではない。それならば悪いのは運命なのか？ それとも神の悪戯いたずらか？ ともあれ責任は親であることは、確かなことであった。

私は、親ではないのである。共通の被害者同志なのであった。加害者に向って怒りを向けても、返って来るのは自分への紙ツブテでしかない。

おにぎりのあと、お膳の食べ物を黙々と食べている妹の横顔も、初老の女の顔になっていた。話はおにぎりにふさわしい小学生でも、身体は老女になっている。この先どうして暮せばよいのかを思うと、気持ちが重くなり、この妹の死を見とらないうちは、私は死ねないと思うのである。

せっかく部屋に運んでくれても妹との話は、何もなかった。荷物の整理もすみ、なすこともなく妹の食事を眺めているだけだった。みじめとも、気楽とも考えようではどうにもなるが、これで当分は面会の心配からぬけられる。

愚鈍の第四度という心身障害者手帳の中では、一番軽度のものであったが、たった一人

の姉妹なのに話し相手にも、相談相手にもならない、ただ衰れで重荷の妹なのだった。

「クスリは何回服むの？」

「さっき服んだ」

「一日に何回服むの？ 朝とその次は……」

妹はこの間嘘について大さわぎとなったのでそれ以後、安定剤を服むようになったのであった。太るのは薬のためもあった。

「……Xちゃんがよろしくって……」

妹は、いつも話を聞いていない。途中で自分の頭の中を横切ることしか言わないのは、集中力がないのか、情緒のつながりが欠けているのだった。

「また聞いていない。一日に何回クスリ服むのか聞いてるんでしょ」と、私は少し強く言った。妹は、お皿のものを黙々と食べている。

「もう齒は癒ったの？」と、私は話を変えた。

「うん」

この間から差し歯にするため通院していたことを看護婦さんから知らせがあり、費用も送った。